

第4分科会レポート

まちの魅力で人を巻き込め！

～地域内組織の協働にみる、事例と課題～

【趣旨】

城下町、港町、温泉街、特産地。そのまち特有の魅力は地域内の絆を育み、さまざまな活動のアイデンティティとして磨かれていく。今も近世の町並みが残る城下町一帯に200を超えるブースが出店する「オータムフェスティバル in 龍野」。行政からの資金に頼らず、住民で盛り立ててきた名物イベントの舞台裏を企画担当者が語る。地元からは10月に古総湯が竣工し、さらなる地域発展に向けて第一歩を踏み出した山代温泉の地域活動を紹介。「山代大田楽」などに見られるシクミとシカケづくり、地域内組織の協働のあり方、新たな課題や悩みを参加者とともに考え、追求していく。



竣工したばかりの古総湯。当日は山代温泉中心部のまち歩きも行われた

【ゲスト】

■吉岡 幸彦（姫路市建設局道路部街路建設課長、オータムフェスティバル in 龍野実行委員会副会長）

姫路市役所に入所後、主に土木建設畑に従事。担当した街なみ環境整備事業が、住民参加のまちづくり部門で「地域づくり総務大臣表彰」を受賞。現在、姫路市建設局道路部街路建設課長として都市計画道路の建設推進に奮闘している。また、地域のまちづくりにも積極的に参加。2010年で8年目を迎える兵庫県たつの市のオータムフェスティバル in 龍野副会長（企画担当）をはじめ、龍野武者行列保存会副会長、全国居酒屋探訪倶楽部吉酔連会長など肩書き多数。

■高間 斉（NPO 法人 はづちを副代表理事）

山代温泉のまちづくり及び、山代大田楽の担い手。山代温泉で時計店を営む一方で、山代温泉財産区(地域住民による山代の源泉、総湯などの管理団体)や山代わざおぎ(山代大田楽の指導団体)、山代温泉観光協会など山代温泉の自治組織の活動にも積極的に関わっている。

【コーディネーター】

■吉田 栄治（NPO 法人 はづちを元事務局長、新宿あともむ地域福祉事業部所長、新宿区立西早稲田地域交流館館長）

山代大田楽の立ち上げ及び、NPO 法人はづちをの創設者の一人。陶芸家として山代九谷焼窯元に勤務していたが地域づくり活動にも関心を持ち、加賀市高齢者プラザ「はづちを楽堂」設置を期に市民団体(現・NPO 法人)はづちをの理事及び事務局代表として職員となる。NPO 法人はづちをを辞任した現在も、市民・NPO 主体のまちづくり活動の促進のため活動中。

協力団体 ● NPO 法人 はづちを <http://www1.kagacable.ne.jp/~hadutiwo/>

会場 ● はづちを楽堂 寿座（加賀市山代温泉 18-59-1）

参加者 ● 18名

1. 分科会内容（要約）

（1）第4分科会の概要

地域活性化において実質的な効用を生み出してゆく上で、地域内組織と協働しながら、全体的な活動につなげることが必要である。

第4分科会では、まず、ハード面で中心街(湯の曲輪)の整備がすすみ、まちづくりにおける今後の方向性が問われている山代温泉のまちづくり活動を事例として取り上げ、参加者も含め地域活性化に従事する人々が抱える課題を抽出する。

そして、ハード面ではなく、人々の結びつきにより地域活性化を進めている事例として、ゲスト/吉岡氏が龍野市で立ち上げたオータムフェスティバル in 龍野の舞台裏をうかがい、生き生きとした地域づくりにつながる協働の在り方、地域再生における「人の役割」について考察してゆく。



分科会風景

（2）NPO 法人はづちをの活動事例

①設立経緯、活動紹介

山代温泉の中心街の廃業旅館跡地を加賀市が買い上げ、利用方法を地元の人々にゆだねた。協議の結果、地元民・観光客の交流施設「はづちを楽堂」が建設された。施設の管理運営団体として地元の有志が集まり NPO 団体「はづちを」を設立。地域の特産品や工芸品の発信、イベント開催、地域の人々への貸室事業などを主に行っている。

設立当時は加賀市の担当窓口が福祉課であったが、現在は観光交流課が担当となり観光施設としての意味合いが強く、地域行事や各種イベント開催などで地域内組織と協働関係にある。

②課題

設立当初から、まちづくりに関しての知識や概念がなかったため、委託契約において市と対等な関係に立つことが難しく、団体運営についても苦戦を強いられている。

正会員の中での運営に対する考え方の違いなどから、活動に積極的に参加する会員が減り、会員同士のつながりが疎遠になっている。

（3）山代大田楽の活動事例

「はづちを」ができるにあたって、地域の仲間が集まって活動を継続していくきっかけとして山代大田楽を紹介する。

①設立経緯、活動紹介

観光協会の要請で山代の地域内組織のひとつである青年会から現在のわぎおぎ(大田楽の運営団体)のメンバーが集められた。

当時は全く知識もないまま 60 人程の規模でスタートしたが、一般参加者を募集するなど活動を広げ、15 年目を迎えた現在は老若男女総勢 250 人もの参加者を集める町の催しに成長した。

大田楽の創始者である野村万之丞氏からの「ただ踊るだけではなく、自分たちの地域をプロデュースしなさい」という教えから、地域内のみで完結せず、祭りを通じて外に町の魅力を発信する意識が芽生えた。大田楽を通じて、町の人々が自発的に無償で地域のにぎわいイベントに参加し、地域の文化を掘り起こしてゆく流れにつながっている。



「山代大田楽」も映像で紹介された

②課題

山代大田楽自体は町の人々の志気を高め、拡大・

継続しているが、山代温泉の観光客は年々減少しており、経済効果という観点から地域活性化を見た場合は、必ずしも成果を上げていると言えないのが現状である。

一方、山代温泉ではこの2年ハード面の整備が進んでおり、町の活性化に大きな糧となってゆくことが予想される。しかし、それを地域のにぎわい創出につなげるためには、地域の人々が町に対しての展望を明確にし、それに向けて協働関係を強化してゆくことが必要である。

そのことを考えるに当たって、人のむすびつきにより実質的な地域活性化を達成した事例として、「オータムフェスティバル in 龍野」の活動をみてゆく。

(4) オータムフェスティバル in 龍野の活動事例

① 設立経緯、活動紹介

龍野市は伝統建築物が市内に点在する城下町として栄えたが、市役所などの公共施設や大型デパートが川沿いに移動したことで中心街が衰退。町の衰退に問題意識を持った町の有志が集まり実行委員会を立ち上げたのが「オータムフェスティバル in 龍野」のきっかけ。

町の風景を変えずに普段の龍野市の町並み、人、自然の魅力を見てもらうというスタンスで開催している。

バラバラな時期に行われていたイベントを集約し同時期に開催することで、来訪者がより多くのイベントに参加できるようにした。また、シャッター通りをなくし町を有効活用する目的で、民家と出店希



ゲスト・吉岡さんによる活動事例の紹介

望者を仲介しイベント出店を支援。年々、会場提供者とイベント出店者が増加。来訪者も増加し、期間中のJR乗客者数の記録も塗り替え、イベント宣伝についての協力も得た。

「オータムフェスティバル in 龍野」を通じて、外からの出店者とのつながりが生まれ、地元の人が各種イベントをより精力的に行うようになった。移住者も増え、町のにぎわいが生まれた。

② 課題

現在もイベント開催について理解を得られていない人、地域内組織もあり、町の魅力を発信したいという思いを伝えていくことが必要である。

龍野市の事例は、バラバラなイベントや人々の思いなどの情報集約というシンプルな方法である。しかし、その背後に実行委員会の地域のにぎわい創出への強い思いと顔のつながり、幅広いネットワークの存在があり、実質的な地域活性化に結びついていることが見出された。

2. 開催で得たもの（新しい発見）

“まちの魅力で人を巻き込め”というテーマの分科会であったが、活動事例の考察を通じて、“まちの魅力＝地域に暮らす人の魅力”であり、「この人がいるから活動の参加したい」、「この人に会いたいからココに来る」、「こんな人がいるまちで暮らし、守っていききたい」、という思いが、より強い協働関係を生み、持続的なまちづくり活動につながるが見いだされた。



ゲスト・高間さんによる活動事例の紹介

3. 分科会のまとめ

- ・ハード面の整備が進んだ町が必ずしも活気がある町であるとは限らない。屋内より外の方が面白い空間を作ることが重要であり、そのためのキーワードとして「人」の存在を意識することが重要である。
- ・地域内の人々と協働し、持続可能な地域活性化を達成するためには、地域の義務としてではなく、地域内の人々の自発的な活動参加が必要になる。そのためには、地域内外で広く深いネットワークを形成してゆかなければならない。

4. 今後に向けた展開

(1) NPO 法人 はづちを

総湯・古総湯ができ、湯の曲輪周辺の整備が進んできた今、山代の見どころの一つとして、山代温泉の回遊性の向上につなげていきたい。

(2) 山代大田楽

大田楽を通じて、参加した子供たちが、将来 山代に帰ってきて町の活性化に携わるメンバーとして活躍してくれることを願い、これからも活動してゆきたい。

(3) オータムフェスティバル in 龍野

現在もイベント開催に理解の得られない人もいるため、町の魅力を発信したいという思いを伝えてゆきたい。

今後は、実行委員会の活動は日程の調整などよりシンプルにしていき、出店者らが自発的に企画の拡大のための発信者となるような環境を作りたい。

5. 参加者の声

- 地域活性化のための活動が地域に根付いていない。
- 行政から金銭等支援を受けているが、地域活性化の担当課が変更した場合、理解のある担当課になるとは限らない点に不安がある。
- 以前は賑やかだった町が現在さびれてしまい、再び活気ある町を取り戻すため模索中。
- 現場と行政では意識に違いがある。
- 経営面では厳しい状態だが、まちづくりを楽しむ

気持ちを大切にしつつ、助成金に頼らず団体として自立していきたい。

- 活動継続のため世代間交流や世代交代が大切だが、まちづくりに若い人がついてゆけない状況にあり継続が難しい。
- 地域資源を持ちながらそれを活かさない、地域全体の活性化や経済面での活性化につながらないため、まちづくりとして不十分な状況である。
- イベントなどを開催しても一過性になってしまい、町の活性化につながらない。
- 団体存続のための営利活動が優先されてまちづくり活動でのリーダーシップを発揮できていない。
- 民間企業は大半が赤字で地域経済に効果は期待できないが、この町で生まれ育ったという理由があるので、何かにつながればと考え、まちづくりに参加していきたい。



分科会風景

6. その他

反省点：ゲストおよびコーディネーターの活動事例紹介に終わり、参加者とゲストとの質疑応答が少なくなった。

(記録者：河崎いづみ)

【第4分科会 アンケート集計結果】

a. 分科会を選んだ理由は何ですか？

- ・能美市のまちづくりを進めていく上で、人材育成問題が避けて通れないから。
- ・開催場所が「はづちを楽堂」だったから。
- ・自分の関係している任意の団体と関係あるため。

b. 分科会はどうでしたか？

- ・地域づくりの事例を参考にしたかった。
- ・県内のさまざまな地域づくりに携わっている方々と情報交換、交流が出来て良かった。
- ・小ぢんまりとしていて良かった。
- ・具体的な事例の発表と質問したことが結果として良かった。

